

新しい文化政策プロジェクト 2023 年勉強会シリーズ

第4回 提言「社会の分子ではなく、分母としての文化政策」から考える、 地域の「維持できる仕組みづくり」

日時：2023 年 10 月 14 日（土）14：00～16：00

会場：京都大学芝蘭会館別館 2 階 研修室 1 および Zoom

発話：熊谷保氏（彌榮自動車株式会社不動産事業部次長、京都産業大学日本文化研究所上席特別客員研究員）

司会：佐野真由子（当プロジェクト代表／京都大学大学院教育学研究科教授）

参加者：朝倉由希、大島光春、蔭山陽太、鈴木佳子、山田奨治、山本麻友美、（プロジェクトメンバー）

一般参加者 18 名

オソリナ・ダリア（記録担当＝佐野研究室大学院生）

当日は初めに佐野真由子プロジェクト代表からの挨拶、参加者全員の自己紹介の後、熊谷氏による発話、それを受けての全体討論が行われた。

ゲストによる発話：地域の維持できる仕組みづくり

熊谷氏のお話によると、ヤサカタクシーの京都での長い歴史は、芸舞妓を座敷まで運ぶ「おふれまい」と呼ばれる事業から始まり、京都・奈良を中心に観光バス・タクシーを運営するようになって今日に至る。昔も今も、地元との協力はヤサカ自動車の活動の大事な一環であり、熊谷氏は「町衆としての心意気と立ち振る舞いを学ぶこと」を自身の課題とされているという。

その例として、ヤサカ自動車が社有の不動産を活用して行った祇園祭の鉾町への協力、及び二寧坂でのまちづくり事業を挙げられた。

ヤサカ自動車は 15 年以上、祇園祭に協力し、山鉾を四つも担当しているという。熊谷氏が尽力された最新の事例として、四条通に所有するビルの改築にあたり、四条傘鉾の二階囃子の伝統を復活させたことに見られるように、「守るべき歴史」と「新しく追加できるところ」を意識し、過去と未来を合わせた取り組みを目指している。

また、二寧坂では地元の人々の協力のもと、日本で初めて町家（ヤサカ自動車所有の建物）にスターボックスをオープンした。世界的ブランドと地元企業のコラボレーションであり、「二人三脚」とも呼べる地域の景観まちづくりの例である。また、売り場を店の一番奥に置くこと、隣の店と競うのではなく、一緒になって世界と競うことなど、京都らしい「商い」のルールを意識したプロジェクトでもある。

提言「社会の分子ではなく、分母としての文化政策」について、熊谷氏はこれが公表された今年 3 月 4 日の公開フォーラムにも参加して深く共感し、書かれている内容に「爽快感」を覚えたと言われた。ご自身が祇園祭と二寧坂で事業を行う中で感じたことが、提言の中でダイレクトな言葉で表現されており、提言の内容を意識して実践していきたいという気持ちが芽生えたという。

特に3番目の柱「私たちが広げる社会」にある、「多様な才能が日本で活躍したいと考え、惹かれてくるような場所にする」という部分は、二寧坂でオーバーツーリズムへの対処法を考える中で必ず話に出る言葉と重なる。また、祇園祭の打ち合わせでも、原点として何に帰るべきなのか、また最終的に何を残したいのかという問題が必ず出るが、そのことも提言で取り上げられている。4番目の柱の中にある、過去から受け継ぐだけでなく、新しいものも加えて、未来に渡していくというのは、今日の祇園祭を支える想いでもある。

そのほか、提言の前文に書かれている「明治の欧化政策を引きずっている社会」という点も、熊谷氏がかもやもやと感じていた問題と合致する。まちづくりでは、先進国ばかりを模範にする傾向がとくに強いという。熊谷氏は西洋社会に倣うばかりではなく、提言の「この社会に何が大切なのかを考える」という趣旨を受け止め、自分の住んでいる場所に目を向け、その豊かな歴史に答えを探すべきだと述べられた。

また、熊谷氏が数々の会議の場を経験し、そこで思い至ったのは、議論の進め方・解決策の決め方においても、現代社会の求める効率良さを目指すばかりでなく、京都の長老たちが従来用いてきた手法、すなわち「ゆっくり話し合うこと」、「輪になって、皆それぞれ思いついたことを述べること」の価値であるという。そういう意味で明治時代の欧化政策から離れ、日本人らしい、「京都らしい」やり方に戻ってみるのもヒントになるかもしれない。熊谷氏発案の「知的縦走／重層」という言葉が示すように、新しい伝統を作るには、「縦」、つまり過去、先人の積み上げてきたものを見て学んでいく必要がある。「共生」という言葉が最近はやっているが、共に生きるだけでなく、ぶつかり合いの中で新しいものを創造することが重要である、と語られた。

参加者による議論

全体討論は京都におけるヤサカ自動車の事業をめぐる質疑応答から始まった。利益と社会貢献のバランス、現地の既存事業との競争、伝統文化の価値の喪失についての質問が出た。

熊谷氏からは、すべき仕事をこなせていれば、利益ばかりを問題にすることのない社風について説明があり、地元の住民・企業との協力が欠かせないこと、会社としての観光面の人気ではなく、地元のためになる、維持できるまちづくりを重要視していることについて、スターバックスの経験を引きながら話された。

その後、議論は「物事の決め方」と「会議の進め方」という問題をめぐって展開された。コミュニティの生成、また、「何かを一緒にやる」ことの価値に関する言及も。(以下は一問一答ではなく、当日の議論の概要である。)

- 提言の中の「余白」の話と、京都の伝統的な議論の進め方には関連性がある。今の若者の議論のスタイルが違うのは、彼らのは無料で集まって時間を過ごす場所はほとんどないし、余白がなさすぎるからかもしれない。そういう場所を造れば、きっと若者ももっとゆっくりした議論ができるようになるのでは。
- アーティストたちの間で、ヒエラルキーがまったく存在しない会議が延々と続くのに参加したことがある。効率の点からは難しいと感じていたが、そのような方法にも良い点がたくさんあると気づいた。話し合う中で、相手のことをより深く知ることができるとか。

- 実はこの提言こそ、延々と話し合うというやり方の産物。はたしてこれが建設的な議論」なのか・・・と感じたこともあるほどだが、みんなで提言を作り上げているうちに、ゆっくりで議論を続けることの価値がわかってきた。
- このやり方のいいところは、みんなが参加しやすい環境を作ること。祭に関する町会の話合いなどでは、世代間の議論の仕方の違いが往々にして顕在化するが、それを乗り越えて合意するプロセスが、それぞれをコミュニティの一部にしてくれる。
- 何かに向けて合意し、協力するという経験に、祭という要素自体も重要な役割を果たしている。そこでは「神様仏様」の存在も大きいのでは。

続いて、熊谷氏が例に出されたまちづくりの二つの例を引きながら、伝統と新しいものの創造について議論が展開した。

- 新しいプロジェクトは何の根拠もなく現れるわけではない。その背景には必ず歴史がある。京都で新しい事業が生まれたのは、やはり対外世界と触れ合って、自分の特徴に気づいたとき。古いものを紡ぎ直して、新しい伝統が生まれていく。
- 現実に新しいものを作ろうとする時は、法律などの制度のほか、周りの状況を理解する必要があり、行政の助けも大事。行政・企業・地域がうまく連携すること。提言にある「文化担当官」という存在もまだまだ足りない。
- 新しいことをやり続けないと、伝統を守れないと思う。その際、キーワードは「共鳴」ではないか。
- 似た言葉に「共生」「連携」があるが、これらにはリスクがある。昨今、「文化」を「福祉」や「教育」など他分野を「連携」させるという発想が良いものとして語られるが、結果として「文化」は狭い領域に追い出されていく。
- 京都の「文化財マネージャー」は意外と観光と繋がっておらず、活用されていない歴史的建物も多い。

そこから、日本の伝統要素や過去に対する姿勢を巡る意見が交わされた。

- マリオというゲームは、日本の「横に動く文化」の体現である。製作者が京都で育ったからそうした発想が生まれたのではないかと考えることがある。
- 提言に「時間をかけて価値を評価していく社会」とあるように、私たちの短い人生で物事を評価するのではなく、それよりはるかに長い時間をかけて形成された京都のような街に住むことで身につくものはあるだろう。
- 日本は海外から色々なものを取り入れて生活の中に浸透させることが得意だが、祇園祭のような伝統文化に新しいことを取り入れるには、まずアーカイブや歴史をみる必要があると思う。
- 文化財の修復を手がける方でも、どう修復したらいいかわからないことがあり、そういうときには、次の世代がいつかより良い解決策を見つけると信じて、そのまま残すのだという。これは自分の人生の範囲で物事を考えないということにつながっているように思う。
- 保存に携わってきた資料が捨てられるかもしれないという事態になり、引き取ってくれたのは行政ではなく、地元の小さな民間企業だった。低い目線で文化を捉え、人と人を繋いでいくことの重要性を実感した。

このように歴史を尊重しながら、文化政策において地元の人々や企業の重要性を再確認する必要性があるという指摘で、今回の議論は収束した。

また、熊谷氏は今後、提言「社会の分子ではなく、分母としての文化政策」の内容をご自身の具体的なまちづくりの取り組みに関連づけていきたいと話され、提言について「出汁のきいたスープ」であるとの比喻を披露された。「スープ」を受け取った地域やコミュニティーでは、それぞれの課題という「具材」を入れて料理を仕上げる。この提言は、そのような「使い方」をすべき文書であるとの明快な解釈を示され、参加者の共感を呼んだ。

参加学生所感

今までは日本の地域の文化政策の話を目にするとき、私自身のロシアの意識で、「大半は行政（政府）がやっているものだろう」となんとなく思っていた。しかし、熊谷氏のお話を伺うと、少なくとも京都の場合は決してそういうわけではなく、もしかするとむしろ地元民と民間企業の役割の方が大きいかもしれないということに気づかされ、驚きながらも、安心感も覚えた。企業は利益に左右されやすい、文化・芸術を「キラキラ」したものに比べて、その価値を下げたままなどとも言われるが、企業と地元民の影響力が大きいほど、実践される文化事業は「上から下される」政策によるものではなく、住民が本当に求めているものにより近い「下から創り上げられる」事業になると私は思う。もちろん、上からの政策から離れるほど、圧力・言論統制の危険性も下がり、自由な文化が生まれやすくなる。

お寺のライトアップのような「キラキラ」したものから、一人の家族が経営する街角の小さなカフェまで、京都の「新しいもの」はこのように企業・地元民によって創造されているからこそ、これほどまでに魅力的な都市になっているのかなと、お話を聴きながら思った。

オソリナ・ダリア（京都大学大学院教育学研究科修士1回生）

熊谷氏が発話のなかで強調された「伝統の創造」は極めて興味深く、かつとても共感できる姿勢であった。過去の人々の「生き方」から学びつつ、現在の人々の「生き方」に応じた変化を加え、さらに未来の人々が変化を加えることも当たり前想定する——この姿勢は「提言」における「分母としての文化」を体現した貴重な一事例であると思う。また、熊谷氏が過去を学ぶ際に重視されているという「町衆の生き方」は、まさしく「提言」における「総合的な知」に相当するものだと思う。もちろん、時代と共に変わりゆく社会情勢や常識より、過去の「総合的な知」は決して現在の人々が無批判に受け入れることができるものではない。しかし、それは将来の人々にとっての、現在の「総合的な知」についても同じはずである。必ずしも具体的な形を伴って後世に残るとは限らない現在の「総合的な知」を、未来の世代にいかにつたえ、批判されつつ受け継いでもらえるか。そのようなことを考えるとき、熊谷氏が地域の人々と過去を学ぶなかで直面されてきた様々な困難が、最も重要な鍵の一つになるに違いない。私にとって今回の勉強会は、過去・現在・未来それぞれの「総合的な知」の「翻訳者」という存在がいかにか重要か、改めて考えさせられる機会となった。

佐藤岳流（京都大学大学院教育学研究科修士2回生）